

群 教 セ	J01 - 01
	平14.206集

人権意識を高める指導の工夫

——体験的活動と国語・道徳の授業を通して——

特別研修員 新木 美知子

《研究の概要》

本研究は、体験的活動と国語、道徳の授業を通して、誰に対しても思いやりを持って公平に接し、その思いをさりげなく行動に表せるような、人権意識の高い生徒を育成するための指導のあり方を明らかにしようとしたものである。具体的には、高齢者擬似体験やボランティア活動などの体験的活動と、国語や道徳の人権に関わる教材を扱った授業を関連させて、自省し、意見交換などをしながら内面を見つめ、人権意識を高めようとした。

【キーワード： 人権教育 中学校 ボランティア活動 大切な存在 思いやり】

主題設定の理由

人はいろいろな人と関わって生きている。人と人々が理解し合うためには、互いの人格・人権を尊重する気持ちが必要である。それぞれに違いがあるのは当たり前であり、それを「個性」ととらえるような見方や考え方を身に付けることが大切だと考える。

本学級（中学校2年生）は、男子14名・女子13名、計27名からなる。保育所からほとんど同じメンバーで学校生活を送ってきたため、人間関係が固定化しており、自分を変えようとする気持ちが薄い。また、自分のことはやるが、ペースが違う友達や周囲の人に対して厳しく批判的な生徒や、自分にあまり関係のないことはしたがない生徒も見られる。19名の生徒はお年寄りと同居しているが、会話は少ないようである。また、障害を持っている人に対しても「大変だなあ」と思う生徒はいるが、「どうしても引いてしまう」という生徒が多い。『高齢者や障害を持った人などが困っていたらどうするか』という質問には、「どうするか分からない・気持ちはあるが行動に移せない・気づかないふりをする・側にはいかない」というような答えもあった。特に障害を持っている人に対しては、ほとんどの生徒が実際に関わった事がないので、じろじろ見てしまうだけだったり、声をかけることには抵抗があるようである。回答全体から、なるべく関わらないでいようとしていること、または「手を貸した方がよいのでは」と思っても行動には移せずにいることが分かる。大きな変化や刺激が少ない小さな村で育ってきた生徒たちなので、今までにない体験をしたり、様々な人について考えることにより、心の成長があると思われる。

そこで、高齢者擬似体験や総合的な学習の時間におけるボランティア活動を通して、思いやりの心を育てるとともに、国語と道徳の授業で人権に関わる題材や内容を扱うことによって人権意識を高め、それを行動に表そうとする意欲と態度を身につけさせたいと考え本研究主題を設定した。

研究のねらい

高齢者擬似体験やボランティア活動を通して、思いやりの心を養い、それをベースに、一人一人の役割や存在の重要性を考える国語の授業を組み入れる。さらに道徳の授業で障害を持った人の家族側からの思いに触れ、差別や偏見について改めて考え、思いやりの気持ちを深める。その結果、生徒の人権意識が高まり、相手の気持ちを考えたさりげない行動がとれるようにな

るであろうことを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

次の見通し 1 から 3 の取り組みを行えば、人権意識が高まり、さらに、思いやりの気持ちを行動に表そうとすることにつながるであろう。

- 1 高齢者疑似体験や妊婦さんの話を聞くなどの福祉体験並びに、総合的な学習の時間における地域施設でのボランティア活動を通して、高齢者や障害を持った人・妊婦・幼児などに対する理解が深まり、相手を思いやることができるようになるであろう。
- 2 体験的活動での思いを大切に、人権に関わる教材を扱って国語の授業を行うことで、たった一人しかいない自分、同様に一人しかいない他の人の存在の重要性に気付き、自尊他尊の意識が高まるであろう。
- 3 道徳の授業で障害を持った人やその家族の気持ちを話し合うことによって、偏見や差別についての考えが深まり、人権意識の高まりに結びつくであろう。そして、誰に対しても思いやりを持ち、その思いをさりげなく行動に表せるようになるであろう。

研究の内容

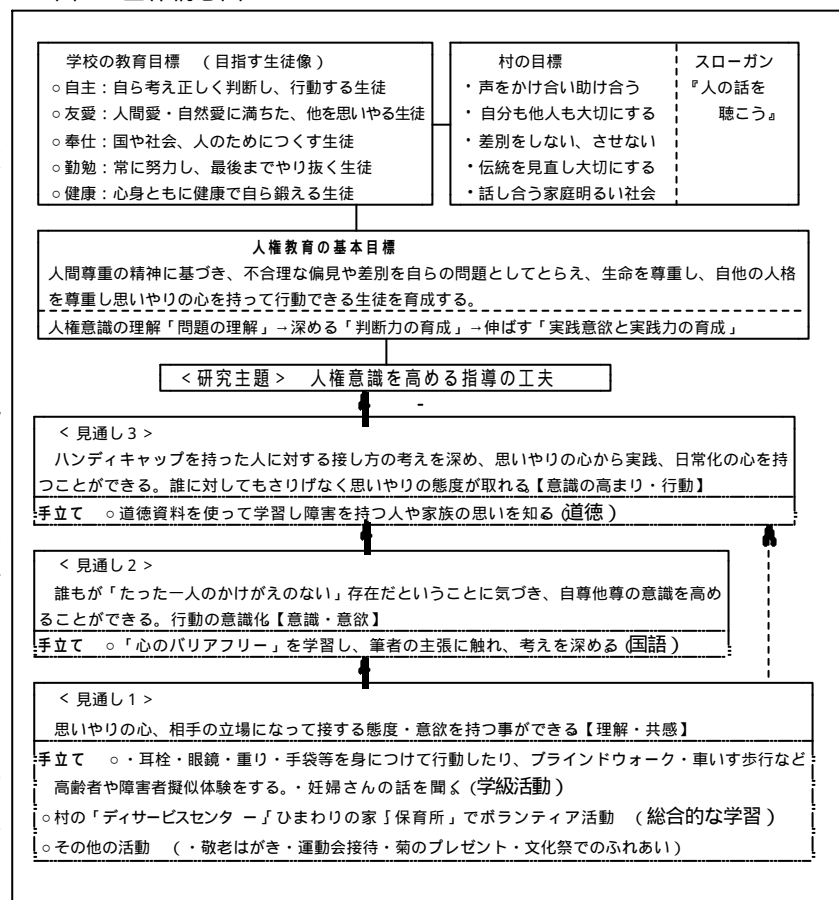
1 基本的な考え方

(1) 「人権意識」とは
互いを尊重し思いやり、
自分も他人も大切にする意
識、そして、思いやりをさ
りげなく行動に表す意識の
ことをいう。

(2) 体験的活動と国語・
道徳の授業の関連性
体験的活動のねらいは「他
人の気持ちを体験を通して
理解し実感し、心から思い
やれるようになること」及
び「気持ちはあってもなか
なか行動に移せない生徒に
とって、自分の意志の伝え
方を考える場、勇気を持っ
てチャレンジする場になる
ようにすること」、国語の授
業のねらいは「乙武洋匡氏
の人権に関する主張に触れ、
自分及び他の人のそれぞれ

の役割や存在の重要性を改めて考える。そして、自分の身近な人たちに目を向けた時、誰もが

図 1 全体構想図



各々の条件の中でその人なりの生き方をしていることを認め、自分と違うことを否定するのではなく、理解し、思いやりのある接し方をすることになること」、道德の授業のねらいは「読み物資料『不合理に、不器用に、ありのままに』（明治図書）と『車椅子の佐桑豊氏の話』（ジュニアボランティア教育 呼びかけ号一部改作）から、及び、聴覚障害がある妹を持つ中学3年生の『少年の主張』のビデオから、障害を持っている人やその家族側の気持ちを理解し、差別や偏見がいかに人を傷つけるかを再認識する。そして、意見交換を通して、今までの自分の態度や考え方を自省し、接し方を考え、今後の実践意欲を高めること」である。

他人を思いやれるようになると、自分と違う考え方や性格、違う状態で生活している人を受け入れることができるようになり、共に生きていることを実感する。そして、「接し方が難しい」と生徒が思っている障害を持った人やハンディキャップを背負っている人たちに対する思いも変わり、差別意識や偏見を持つことがなくなるであろう。その結果、互いに誰をも尊重する意識が高まってくると考える。

(3) 『Y Iカード』について

友達からしてもらった行為でうれしかったことや、自分が気付いた友達の良い行為などを記入するカードで、教室に掲示することによって、相手の気持ちを理解できるようにしたり、実践意欲を高めるものである。YOU（あなた）とI（私）の頭文字から取り、友愛を意味する。乙武氏の「ためらったり遠慮したりせず寄ってきて欲しい、行動に表して欲しいのだ」という言葉に「なるほど、そうなのか」と納得し、「友達に対しても、相手が迷惑だと思っていないと分かれば、困っている時にはもう少し手助けしたり、声をかけたりしたい。何か気持ちを知る方法はないだろうか」という生徒の声から始めたものである。

(4) 全体構想図（図1）

2 実践の概要及び結果と考察

考察にあたっては、研究対象学級2年B組全員及び抽出生徒（A男、B子）の表情、事前事後のアンケート、発言、感想等の分析を通して行う。

A男：優しい性格で目立つ事は嫌うが、芯はしっかりしておりクラス全体から信頼されている。同居している祖父にはやや冷たい感じがある。

B子：学力は高いが、人のために進んで何かをしようと、クラスのためにまとめ役をするという気持ちはあまりない。高齢者や幼児に対して苦手意識を持っている。もたもたしているような人には、きつい言葉を言うことがある。

(1) 体験的活動を通して、いろいろな人に対する理解が深まり、相手を思いやることができるようになったか。（見通し1）

ア 実践の概要

学級活動の時間には・妊婦さんの講話（苦労や親の思い、命の大切さについて1時間）・ボランティア活動の事前学習として高齢者擬似体験（班ごとに全員が高齢者擬似体験グッズの耳栓・眼鏡・重りなどを身に付けて、歩行、食事、読書、手紙書き、会話、車椅子、ブラインドウォーク等を体験、2時間）

総合的な学習の時間では、3カ所でボランティア活動をした。

「デイサービスセンター」では、班ごとに手作り紙芝居や将棋・かるた取り・ゲーム・合唱などをしたり介護の手伝い、「ひまわりの家（障害者福祉作業所）」では、障害を持った人と一緒に畑での作業や部品の組み立て、「保育所」では、幼児の着替えの手伝いや遊び相手をしてふれあった。体験後、感想や今後の自分はどうかあるべきかなどの考えを、資料1の形式でプリントにまとめた。

資料1 ボランティア体験のまとめ

- | |
|----------------------|
| 1. 日付 行った場所 |
| 2. どんなことをしたか |
| 3. 学んだこと |
| 4. 交流を通して自分の中で変化したこと |
| 5. 今後の自分 |
| 6. 全体を通して |

イ 結果と考察

高齢者擬似体験では、お年寄りの状態を体感し驚きが大きかった。A男は「本は読みづらく、文字は何を書いているかわからなかった。困っていたら自分から声をかけたり、すぐに助けてあげたい」、B子は「体が思うように動かなくて大変だと思った。お年寄りが考えていることや思っていることをよく考えて助けてあげたり、声をかけてあげたいと思った」と感想を書いた。また、お年寄りの大変さを思い、デパートやスーパー等のバリアフリー化について意見を述べた生徒も多かった。今後の接し方についての考えは「・重い荷物を持っていたら手伝う・席をゆずる・お年寄りのしたいことは取らないで、できないことは私たちがやる・お年寄りの気持ちを考える」等にほぼ分類された。以上のことから、生徒はお年寄りや体にハンディキャップのある人がどんな思いをしているのかを、相手の側に立って感じる事ができたと考えられる。

ボランティア活動では、全員が多くの事を学んできた。【デイサービスセンターにて】A男は、偶然その日来ていた祖父の手を取り、ゆっくり椅子の所へ案内し座らせていた。顔に笑みはなく喜んでやっているようには見えなかったが、冷たい感じではなかった。その時の心境を問うと「家であんなことはしない。あそこに行き、授業の時間だからやった」と述べた。なぜお年寄りが嫌なのか理由を聞いたところ「自分の祖父の性格が好きじゃないだけで、他のお年寄りは嫌いというわけではない」とのことだった。B子は体験を資料2のようにまとめた。

【保育所にて】A男「小さい子は自分で何もかもできるわけではないので、いろいろと手伝ってあげたい。小さな子と交流するには優しく接しないといけないことがわかった」。B子は保育所で小さい子の面倒を見、喜んで帰ってきた。「あっという間に私は周りを取り囲まれていました。こんな体験をするのは初めてだったので、なんだかとてもうれしくなりました。小さい子は嫌だとか、汚いからさわらないで欲しいとか思うことは前よりなくなっていました」

資料2 デイサービスセンター B子の感想

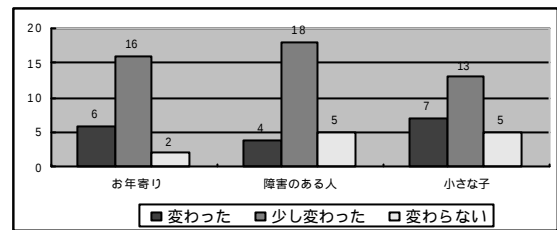
- ・学んだこと・・・小さい子より接し方が難しい。
- ・自分の中で変化したこと・・・お年寄りに会った時、耳が遠くて挨拶しても気づかないだろうなと思うと、挨拶をしないことがあったが、これからはしようと思った。
- ・今後の自分・・・親が年寄りになってもしっかり面倒を見る覚悟でいるようにする。どんな時でも、人をバカにしないようにしたい。

【ひまわりの家にて】A男は交流を通して自分の中で変化したことを「障害を持った人でも普通に接する事ができる。障害があるからといって何もできないわけじゃないと思った。みんな普通に作業できていたので驚いた。一緒に作業して楽しかった」とまとめた。B子は「障害を持っている人に対して考え方が少し変わった。健常者と変わらないと思えるようになった気がする」と答えた。また、時によってクラスに加わる特学の男子に対する思いをめぐらせ「今後は、自分の身近にいるT君に嫌な目を向けてしまっていたのを、意識して直していきたいと思います。知的障害がある人へのイメージを変えていきたいです」と書いた。他のやや思いやりに欠けるところがある男子生徒も「障害を持っている人だって同じ人間なのだから、差別なんてとんでもないと思う。頑張ってるし、普通の事をやっているの自分たちも普通に接する事が大切だと思った」とまとめた。

3カ所での体験活動終了後のアンケートで、A男はお年寄りに対してだけは、考え方が「前とあまり変わらない」、理由は「嫌だから」と答えたので、面談をすると「自分の祖父に対して、他のお年寄りに対してはそんなではない」ということだった。数回だけの体験で今までの思いがすぐには変わらない生徒もいるのは当然と思える。しかし、感想の中には「体験を通して私の中で変わったことは お年寄りなどにどう接していいか少し分かってきた。今までは困っている人などを見ているだけ。でも実行してみようという気持ちが高まり、次からは行動に移せそうな気がする」といったものもあった。擬似体験やボランティア活動をし

てみて、各対象者への考え方や接し方の変化はグラフ1のようになっている。(お年寄りに対して3人、幼児に対して2人は体験前から、好きという気持ちがあったので、「変わらない」人数から除く)実際に活動回数を重ねる度に、生徒たちは言葉遣いや表情に気をつけながら、相手にあった動きをしようとするようになっていて、うち解けた姿は自然な雰囲気だった。このことから、大部分の生徒は体験的活動を通して、相手の身になり理解を深め、考え方や接し方が変わってきていると言える。夏休み中に男子1名、女子2名の生徒が自主的に「ひまわりの家」に行ってボランティア活動をしたことも、気持ちの変化の表れと言えるのではないだろうか。

グラフ1 ~に対する変化 (人)



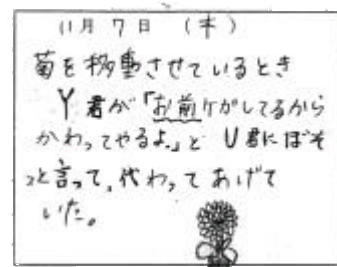
(2) 国語の題材「心のバリアフリー」の授業で人権について考えることを通して、自分や他人の存在価値に気付き、自分を大切にするとともに他人を尊重する意識が高まったか。

(見通し2)

ア 実践の概要

「他人を認める心」「自分を大切にする」「たった一人の自分、目の前にいるこの人もたった一人しかいない大切な存在」という筆者の人権尊重の言葉を改めて考え、日常生活を振り返った。ある友達にはきつい言い方をしてしまったり、高齢者や幼児に冷やかかだったり、障害のある人や外国人から何となく遠ざかってしまうことなどを自省し、体験的活動を通して得たことをもとに、今後はどうあるべきかについて考えを深めた。また、以前、クラス全員で互いの<よい面やすごいと思うところ>を書き合った用紙を、授業の中で見直し、自分が気付かなかった自分のよい面や人が認めてくれていたところから、自分の存在価値を再確認した。そして、自分も友達のことを書こうと考えた時、一人一人の良さが分かったことを想起した。行動については『YIカード』の記述内容を紹介し、友達の好意をお節介だと思ふより感謝していることが多いことを知らせ、もっと積極的に行動を起こすことを促した。資料3はカードのうちの一つである。

資料3 YIカード



イ 結果と考察

筆者の主張に共感し、人権について考えることができた。授業前後のアンケートの比較は、次のようになった。

- ・「どうせ自分なんか」と思ってしまう 27人→14人
- ・「友達の命と自分の命を比べると」
(自分の命の方が大切) 16人→5人 (同じ) 7人→22人
- ・「困っていたらどんな人にも手を貸したい」 8人→19人
- ・「実際に行動に移した」 8人→13人

YIカード・掲示



自分の存在の大切さを自覚し、自分以外の人も大切な存在であることに気付いた生徒が多かった。筆者の言葉や『YIカード』に心を動かされ、行動に移そうと思うようになった生徒が増えたことも分かる。A男は授業後の感想を資料4のように書いている。B子は友達の行いや動きに対する不満のつぶやきが減り、隣席の男子に問題の解き方を教える姿が見られるようになった。そして、「他の人のことを考えられるようになっていくと思う。自分が嫌なことをされても、相手が悪気がないのなら、怒ることもあまりしなくなった。でもまだ悪口は出てくるので、そこは直したいと思った。友達には、やってあ

げた方がいいかなと思うことは、喜んでくれるということがカードから分かったから、ためらわずにできるようになった。自分のために誰かが何かをしてくれた時は、嫌だと思った事がある人にも『ありがとう』と言えるようになった。こういう授業をして考えてみると、変わったところのある自分がいるのに気づけた」と感想をまとめた。生徒の＜自分、障害のある人、その他の様々な人＞に対する意識の変化はグラフ2のようになった。視野が広がり、以前より自分や他の人のことを深く考えるようになったのではないだろうか。また、「バリアフリー実現のためにはまず誰の力が必要か」という質問に対して、「わたし」「わたしたち」と答えた生徒の数は授業後、12人から22人に増え、人任せではなく自分の問題としてとらえるようになったことが分かる。中には「お年寄りや体の不自由な人のために特別な物を作るより、他人のことを少しでも思いやり、自分で行動する心を作った方が良くと思う」という意見を書いた男子もいた。自分と違う人を最初から避けたり、理解しようとししないのではなく、思いやりを持って接する心、自分から行動を起こすことの大切さに気付き始めている。以上のことから国語の題材「心のバリアフリー」の授業で筆者の主張に触れ、体験的活動前の考え方などを自省し、人権について考えることは、人権意識を高めるとともに、思いをそれだけに終らせず、実際の行動に表そうとする意欲を持たせるのに有効であったと考える。

(3) 道徳の授業を通して、障害を持った人やその家族の気持ちを話し合い、思いやることは、偏見や差別について考えが深まり、人権意識の高まりに結びついたか。また、誰をも思いやり、それがさりげない行動に表れるようになったか。(見通し3)

ア 実践の概要

読み物資料「不合理に、不器用に、ありのままに」と「車椅子の佐桑豊氏の話」を使って、障害のある子供を持つ母親の気持ちや、障害を持つ本人の気持ちをグループで意見交換をし、自分の考えを深め広げた。また、聴覚障害のある妹を持つ中学生の「少年の主張」のビデオを見てその思いに触れ、授業全体の感想をまとめながら、今後どうあるべきかを考えた。

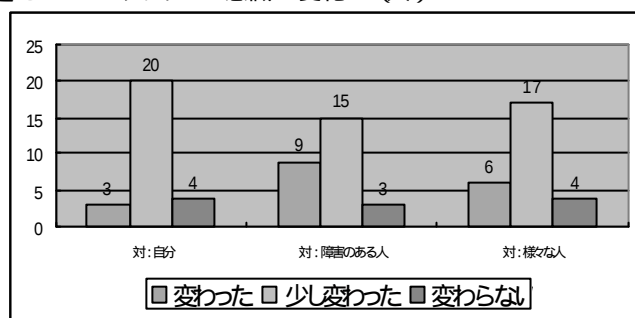
イ 結果と考察

授業では母親の行為から、障害者に対するいじめへの批判やどうすることが良い事なのかなどについての意見が多く出た。意見交換の中で生徒は偏見や差別の恐ろしさやひどさを理解できた。A男は資料5のように書き、B子にも心の変化が見られた(資料6)。どの生徒もできる事は手助けしたい、という気持ちが体験的活動を通してかなり高くなっており、授業後は積極的な取り組みをしようとする意欲が見られた。「障害があろうがなかろうが、みんな同じ人間。家にも障害を持った人がいます。時々うるさく聞かれるので、少し怒ってしまいます。でも、今度からは障害を含めてその人だと考えていきたい」と素直な気持ちを書いた生徒もいた。

資料4 A男の感想

僕は今までに体験したボランティアで障害を持った人達と接し一生懸命に仕事をしている姿を見ました。お年寄りも明るく楽しく生活している姿も見ました。僕はこの体験をしながら、この国語の授業で武さんの障害を持っても同じ人間という考えに共感することはできなかったと思います。障害を持った人やお年寄りの人達の生き生きとした姿を見ることがなかったら、自分は普通の人間。あの人たちは自分と違う人だ。障害者は障害者。と線を引いてしまっていたと思います。でも今は障害者も健常者も関係なく同じ人間と見れるようになってきたと思います。また、人間一人一人のその人しかできないことがわかってきたり、相手しさを認められはじめてきたと思います。以前僕は祖父の介護をしていました。しかし、このボランティアで体験したことや勉強をしたことで、思いがかわりました。祖父も自分とかわらない人間なんだと、少しづつ思えるようになってきました。この体験をしたことで僕の心はかわったと思います。

グラフ2 意識の変化 (人)



A 男は正義感が強いだけに、家族の意見に耳を貸さない祖父の頑固な態度が許せないようであるが、年老いた祖父の立場に立ったり、祖父が育った時代の厳しさ、そこで培われた考え方などを理解できるようになった。「おじいさんのやることや言うことに対して、腹を立てないようにする」という日記から、自分の感情を抑えていることが分かる。面談でも「おじいさんに対して少しは変わった」と恥ずかしそうに答えた。B 子は友達のことを考えた行動が見られるようになり、生徒会役員選挙に立候補した友達の責任者を引き受けて、応援演説などもした。

資料 5 道徳の授業で感じたこと A男

障害を持っていても人は人。国語で勉強した『一人一人が、かけがえのない存在』というのはとても大切な言葉だと思った。障害を持っているからといって、差別したりするのはとてもいけないことだと思う。話の中では、親が自分の子に障害があるからといって、子供を一步も出さないということがあった。「周りからいじめを受けるのがかわいそうだから」と家の中にずっと入れておくのは、その子の自由を奪っていると思う。普通の生活をさせていれば、次第に周りの人も慣れ、いじめはなくなるのではないかと思った。この親は子供を家にずっと入れておくことによって、いじめがなくなる可能性も奪っていると思った。でも、一番悪いのは障害を持つ人をいじめる人たちだと思った。僕はボランティア体験をして、障害を持っている人たちが生き生きと楽しそうに作業をしているところを見て、障害を持っている人だっていろいろな作業ができるんだ、と思いました。障害を持っている人だって僕たちと同じくらいいろいろなことができる、同じ人間。そんな障害を持つ人の存在を認め、大切にしていきたい。

資料 6 道徳の授業で感じたこと B子

今までは障害を持っている人のことだけ考えていたけれど今日、その親の気持ちを考えてみたら、本人と同じくらいつらいことに気が付きました。特に母親の気持ちは複雑だと思います。障害を持つ人や、その母親のためにも、差別をしたり偏見を持ったりしないよう、いつも「誰でも同じ人」という考えを頭に入れておきたいと思います。あと、もう同情をしないようにしたいと思います。自分がもし、障害があったとしたら、やっぱり同情されたくないと思うからです。今までに、障害を持った人に会ったことは少ないですが、これからは出会った時は、自分から声をかけたり、困っているようだったら手助けしてあげたいと思います。

また、『遅刻が多い友達の家へ、全く逆方向の男子数名が、自分たちで相談し、何日も迎えに行ったこと』、『一人暮らしの老人にプレゼントするために2年生全員で育てていた菊に、休日の当番が決まっていなかったからと、朝、自主的に学校に来て水をやった生徒がいたこと』などからも、生徒たちは誰に対しても思いやりをもって公平に接し、それをさりげなく行動に表せることができるようになってきたと考える。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 体験活動の機会を設け、いろいろな状況の人々と触れあったことで、生徒たちは相手の気持ちを以前よりは理解できるようになり、思いやりの気持ちを持てるようになった。そのため、クラス全体、穏やかで優しい雰囲気になったと感じられる。
- 体験的活動での思いをベースに、人権に関わる内容の授業をした結果、頭だけで理解しているのではなく、あるべき姿を考えられ、実行しようとする意欲を持てたので人権意識が高まったと考える。
- 『Y I カード』を活用して、友達の行動を紹介し合ったことは、思っているだけではなく、実際の行動に表そうとする気持ちを高めるのに有効であった。

2 今後の課題

ボランティア活動を学校が意図的・計画的に設定して行うのではなく、生徒たちが自らの力で施設等と関わり、更に多くの体験ができるようにしていきたい。そのために、村や福祉協議会と連携を密にして、理解や協力を得られるように努める必要がある。

< 参考文献 >

- ・ 内海 俊行 著 『福祉の授業』 明治図書 (2000)
- ・ 上杉 賢士・田中 雅文 編集『中学生にボランティア・スピリットを育てる』明治図書 (1997)